

令和元年6月7日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02556

研究課題名(和文) 言語的発想法の視点による表現法の地域差とその成立に関する研究

研究課題名(英文) Study on regional difference of expression method and its formation from the viewpoint of linguistic ideation method

研究代表者

小林 隆 (KOBAYASHI, Takashi)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：00161993

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：日本語方言における表現法とそれを生み出す言語的発想法の地域差について考察し、その成立過程について、社会的・歴史的背景との関わりの中で検討した。表現法の背景にある地域ごとの言葉に対する発想法の違いに目を向け、発言性、定型性、分析性、加工性、客観性、配慮性、演出性という7つの発想法を抽出した。そして、それらの発想法が地理的には日本の中心部と西日本で発達し、周辺部と東日本では未発達であることを明らかにした。また、それらの特徴は、社会的には農村型社会から都市型社会への移行によって強化され、歴史的には古代から近代への流れの中で発展したと結論付けた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、表現法という従来の方言学が十分対象としてこなかった分野を開拓した点に研究上の意義がある。しかも、「言語的発想法」という独自の概念を導入することで、単に表現法の現象面の理解だけでなく、それを生み出す人々の言葉に向き合う姿勢や、それを支える社会環境との関連を明らかにすることができた。

また、表現法(言語行動・談話展開)の地理的・歴史的研究に対して、今後の研究の構想を示し、一つの指針となるモデルを提示した点も重要である。同時に、研究が手薄だった地域間コミュニケーションギャップの問題にも、学術的・実用的の両面から刺激を与えることができたと考える。

研究成果の概要(英文)：I considered the regional difference of the expression method in the Japanese dialect and the linguistic ideation method that produces it, and examined the formation process in relation to the social and historical background. Focusing on the differences in the way of thinking for words in each region behind the expression method, I extracted seven ways of thinking: speaking, regularity, analysis, processability, objectivity, consideration, and directionality. And, it was clarified that those ideas were geographically developed in the central part of Japan and West Japan, but underdeveloped in the peripheral part and East Japan. In addition, they concluded that their characteristics were reinforced by the transition from rural society to urban society in the social context, and historically developed in the trend from ancient times to modern times.

研究分野：日本語学

キーワード：言語的発想法 表現法 言語行動 談話 日本語方言 地域差 方言学 日本語史

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまでの方言学は、音韻やアクセント、語彙、狭義の文法といった言葉の構造面を対象とすることが多く、その運用面についての研究が遅れていた。しかし、最近では、言語学・日本語学の研究動向の刺激を受けて、方言学の分野でも表現法（言語行動・談話展開）への関心が高まりつつある。例えば、国立国語研究所（2006）『言語行動における「配慮」の諸相』や野田尚史・高山善行・小林隆編（2014）『日本語の配慮表現の多様性 - 歴史的变化と地理的・社会的変異』では配慮表現が、『月刊言語』38-4（2009）特集「対話の方言学」ではいくつかの言語行動が、そして、沖裕子（2006）『日本語談話論』では談話展開が取り上げられている。現在の方言学にとって、こうした表現法の地域差についての研究は、今後開拓すべき新たな重要課題の一つと認識されている。

また、こうした表現法に関する研究は、方言学の内部にとどまるのではなく、現代語研究や日本語史研究の知見の導入が求められている。例えば、上記の野田尚史ほか編（2014）では、配慮表現について現代語・日本語史・方言の専門家が協力して課題に取り組んでいる。また、日本語学会平成 22 年度春季大会シンポジウム「対人関係の日本語史」においても、そのような試みがなされた。表現法を方言学的に研究する場合にも、現代語研究や日本語史研究（歴史的語用論）の知見・視点を取り込みつつ考察を進めることが必要である。

さらに、方言学の研究分野のひとつに、方言の歴史的な形成をテーマとする方言形成論があるが、この分野は、小林隆編（2008）『シリーズ方言学 1 方言の形成』、同（2014）『柳田方言学の現代的意義 - あいさつ表現と方言形成論』等の成果によって、近年あらためて活性化しつつある。表現法の地域差についても、その形成過程や要因を検討し、言葉の構造面における方言形成との共通性や異質性を明らかにすることが期待される。

2. 研究の目的

方言学において、これまで十分研究がなされてこなかった分野の一つに表現法がある。表現法の地域差を明らかにするためには、単に現象面だけを扱うのではなく、その背景にある地域ごとの言葉に対する発想法の違いに目を向ける必要がある。さらに、それらの地域差の成立には、社会的背景や歴史的要因が関係しており、そこまで踏み込んだ検討が必要になる。本研究では、以上のような課題に対して、理論的検討と調査による資料の収集・分析を通して明らかにしていく。

このような目的を達成するために、具体的には次のような課題に取り組むことにした。

(1) 理論面での検討

「社会と表現法の関係モデル」、および「言語的発想法」の概念と7つの分類について、社会言語学や文化言語学などの知見を取り込みながら理論面での検討を行い、より精密で妥当性の高いものに仕上げていく。また、客観的な論証のために、「言語的発想法」のあり方を具体的な事例に即して判定するための指標の作成も試みる。

(2) 表現法の地域差の網羅的把握

個別の事例に頼るのではなく、さまざまな表現法を網羅的に把握することで研究の実証性を高める。この網羅性の確保のために、「(A) 目的別言語行動の枠組み」に従って表現法を把握するとともに、それぞれの表現らしさを生み出している「(B) 表現技法の種類とその意識」にも注目する。また、「(ア) 重点地域調査」と「(イ) 全国分布調査」の2種類の調査を企画することで、地域差の把握をより確実かつ詳細なものにしていく。

(3) 表現法の歴史的展開との関係

中央語の歴史と方言の地域差との関係を考えるための前提として、歴史的語用論の成果を踏まえながら、中央語史における表現法の展開を明らかにする。今回は対象とする表現法と時代を絞り込み、その部分について確実な見通しを得ることをめざす。

(4) 発想法の視点からの考察

上記(2)(3)で収集した資料を対象に、上記(1)で理論的に再検討した発想法の視点から分析を加える。それにより、「社会と表現法の関係モデル」に基づく表現法の地域差の成立について一定の結論を得る。

3. 研究の方法

上記の研究の目的に対応させ、次のように設定した。

(1) 理論面での検討

「社会と表現法の関係モデル」と「言語的発想法」の概念および分類について理論的な検討を行う。言語と社会・文化との関連について提出されている「高文脈文化・低文脈文化」の考え方を参考にしたり、Basil Bernstein の「限定コード・精密コード」の考え方を検討したりするほか、社会学や行動科学など関連科学の知見も取り入れる。日本では、藤原与一ほかの研究者が使用する「発想」「表現型」「表現発想」といった用語と応募者が考える「言語的発想法」との関係を整理し、その概念をより明確化させる。また、実際の表現法について7つの発想法のあり方を判定するために、客観的な指標の作成も行う。形式に注目した絶対的な基準や、事象間の相対的な序列づけを行う方法などを考案する。

(2) 表現法の地域差の網羅的把握

目的別言語行動の枠組みによる表現法の調査、すなわち、「目的別言語行動」とは言語行動の

種類をその目的によって分類し、それによって表現法を観察する。ここでは、次の9種類に分類する。1. 要求表明系 (= 要求を述べる) 2. 要求反応系 (= 要求に答える) 3. 恩恵表明系 (= 恩恵を与える) 4. 恩恵反応系 (= 恩恵に答える) 5. 疑問表明系 (= 疑問を述べる) 6. 疑問反応系 (= 疑問に答える) 7. 主張表明系 (= 主張を述べる) 8. 感情表明系 (= 感情を伝える) 9. 関係構築系 (= 関係を結ぶ)。

(3) 表現法の歴史的展開との関連

方言調査と同様に目的別言語行動の視点から、該当する場面の表現を抽出し整理する。時代的には、言語行動についての情報が一定程度得られるようになる中世後期・近世の文献を調査する。

(4) 発想法の視点からの考察

以上の理論面での検討と方言調査データの分析を通して総合的な考察を行う。それにより、表現法とその発想法の地域差を実証的に明らかにする。また、社会環境からの影響について関連諸科学の知見を取り込み、一方で、文献調査による歴史的展開の様子も参照することで、「社会と表現法の関係モデル」に基づく地域差の形成について一定の結論を得る。

4. 研究成果

(1) 理論面での検討

「高文脈文化・低文脈文化」の考え方と「言語的発想法」の考え方を対比することで、「高文脈文化」の中には次のaとbのような性格の異なる2種類のコミュニケーションのあり方が混在していることを明らかにした。

a. 原初的な高文脈文化(発言性がそもそも弱く、本来的に言葉に頼らない文化)

b. 発展的な高文脈文化(発言性は高いものの、加工性によってその一部が制御される文化)

東北方言は前者、すなわち、原初的な高文脈文化に分類される一方、後者、つまり、発展的な高文脈文化の典型とみなされるのが関西方言である。

(2) 表現法の地域差の網羅的把握

通信調査法による全国2000地点調査を実施し、表現の地域差に関するデータを収集した。ひとつは、上記の目的別言語行動に関する調査内容であり、もうひとつはオノマトペの使用に関する調査内容である。前者の調査の企画は、別途作成中の目的別言語行動の談話資料、『生活を伝える被災地方方言会話集』と連動させ、全国調査の分布データと、宮城県の2地点の談話データを連動させることができるようにした。また、既存の談話資料であるNHK『全国方言資料』から関連する情報を抽出し、考察に使用した。その結果、次のようなことが明らかになった。

甲問の会話について見ると、「中央」対「周辺」、「西」対「東」といった地理的・大局的な地域差のほかに、「都市的地域」と「農村的地域」といった社会的・局地的な地域差も重要であることが見えてきた。「言語的発想法」の地域差モデルとして提示した巨視的なレベルの中心性・周辺性と、微視的なレベルの中心性・周辺性との複合的な様相が甲問の会話にも現れていると理解してよいだろう。

オノマトペの表現性について見ると、東日本のオノマトペの役割は事態を詳細に描き出すことにあり、西日本のオノマトペの役割は発話を効果的に展開することにあると考えられる。対比的に言えば、「東の描写性/西の演出性」という機能上の違いが、東西日本のオノマトペには存在する。これらの機能を発揮するために、東日本のオノマトペは定型性が弱く、その場で臨機応変に生成され得るのに対して、西日本のオノマトペは定型性が強く、決まり文句のように会話に投入される。オノマトペの機能の違いが、「型」に対する志向性にも反映していると考えられる。

依頼会話の特徴を気仙沼市方言について見たとき、感動表現によって共感の形成が図られたり、直接的な発話態度によって自分に引きつけた提案や恩を売るような発話がなされたりする一方で、共通語では期待される恐縮表明や、受託発話への返答に出現が見込まれる感謝表明が出てこないなど、配慮表現の使用の不活発さが指摘できた。

(3) 表現法の歴史的展開との関連

挨拶関係の用例を収集し、歴史的変動と地理的展開との関係について見通しを付けた。例えば、入店の挨拶で買い物という目的を直接的に言い放つ東北地方の「買う」の類は、室町時代の狂言台本にその痕跡が認められる一方、近世以降の挨拶とは異なるものであることなどが明らかになった。

(4) 発想法の視点からの考察

以上を総合的に考察し、「表現法 言語的発想法 言語環境 社会環境」という連鎖関係から成る「社会と表現法の関係モデル」をより実証的なものとした。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 8 件)

1. 小林隆「東北方言の特質 - 言語的発想法の視点から - 」, 益岡隆志編『日本語研究とその可能性』, 開拓社, pp.248-276, 2015.6.28, 査読無

2. 小林隆・内間早俊・坂喜美佳・佐藤亜実「言語生活の記録 - 生活を伝える方言会話集 - 」, 大野眞男・小林隆編『方言を伝える - 3.11 東日本大震災における取り組み - 』, ひつじ書房, 89-116p, 2015.5, 査読無

3. 小林隆「言語的発想法と方言形成 - オノマトペへの志向性をもとに - 」,大西拓一郎編『空間と時間の中の方言』,朝倉書店,39-70p,2017.5, 査読無
4. 小林隆・澤村美幸「感動詞の方言学」,小林隆ほか『方言学の未来をひらく - オノマトペ・感動詞・談話・言語行動 - 』,ひつじ書房,87-205p,2017.5 (共著), 査読無
5. 椎名渉子・小林隆「談話の方言学」,小林隆ほか『方言学の未来をひらく - オノマトペ・感動詞・談話・言語行動 - 』,ひつじ書房,207-337p,2017.5 (共著), 査読無
6. 小林隆「文献を利用した新しい方言研究 - 十返舎一九・谷崎潤一郎が見た関西人の言語行動 - 」,『日本語学』36-9, 2-13p,2017.8, 査読無
7. 小林隆「談話からみた挨拶の定型性 - 「おはよう」の地域差をめぐって - 」,『方言の研究』3, 77-101p,2017.9, 査読有
8. 小林隆「「疑似会話型面接調査」の試み」,東北大学方言研究センター編『文化庁委託事業報告書 被災地方言の保存・継承のための方言の記録と公開』,東北大学大学院文学研究科国語学研究室, 70-79p,2018.3, 査読無

〔学会発表〕(計 4 件)

- 坂喜美佳・佐藤亜実・内間早俊・小林隆「方言会話の記録に関する一つの試み」,日本語学会2015年度春季大会,関西学院大学,2015.5
- 小林隆「東日本大震災 - 東北大学方言研究センターの活動から - 」,日本方言研究会創立50周年記念企画シンポジウム,山形大学,2016.10
- 小林隆「感動詞の地域差 - 何のためにどう驚くか - 」,友定賢治代表「感動詞ワークショップ」,県立広島大学,2017.12
- 小林隆「とりたての地理的傾向 - 専用形式を持たない地域 - 」,国立国語研究所「NINJAL シンポジウム日本語の名詞周辺の文法現象 - 名詞修飾表現ととりたて表現 - 」,国立国語研究所,2017.12

〔図書〕(計 3 件)

- 小林隆編『方言学の未来をひらく - オノマトペ・感動詞・談話・言語行動 - 』(共著),ひつじ書房,417p,2017.5
- 小林隆編『感性の方言学』,ひつじ書房,355p,2018.5
- 小林隆編『コミュニケーションの方言学』,ひつじ書房,420p,2018.5

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年：
 国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年：
 国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

- 東北大学方言研究センター：<https://www2.sai.tohoku.ac.jp/hougen/>
 東日本大震災と方言ネット：<https://www.sinsaihougen.jp/>

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。